

学園だより No.32

■発行人・発行所／

学校法人 北海道カトリック学園 理事長 勝谷 太治
札幌市中央区北1条東6丁目10カトリック札幌司教館内

平和について

理事長 勝谷 太治

今年は北東アジアの緊張やその後の融和ムード等、平和について考えさせられた年です。ここでは、少し違った視点で平和について考えてみたいと思います。

私たちは誰しも、過ちや不正を見るとそれを告発し、正しい道に導こうとする正義感を持ち合わせています。しかし、不幸なことは、誰もが自分こそが正しいと確信していることです。集団の場合、利害が対立するグループや、イデオロギーの異なるグループ間と言う迄もなく、国家間の紛争などはどれを見ても、それぞれの国が正当な理由を持っているのです。どちらかが絶対的悪でどちらかが絶対正義ということはありえないのです。個人の場合尚のことです。言うなれば、私たちは相手を断罪して自分の立場を正当化しているとも言えるのです。

人を「改心」させようとする時、私たちがよく陥る過ちは正論をもってその人をかえって頑なにさせてしまうような非難、忠告、告発をしてしまうことです。これはイエス様が最も嫌ったことです。過ちに気づけない愚



かさ、分かっているも抜け出せない弱さ、このような現実をも私たちは抱え持っているのです。これを見ずして、ただ大上段に正義を主張するところからは解決はもたらされません。敵対する相手の心の深みにある人間的弱さに共感することなくして、理屈だけで相手を変えることは困難です。多くの場合、力関係でどちらかが屈服させられることになります。その場合、正義は「力」なのです。

キリストのもたらした正義は「愛」です。敵を力で屈服させるのではなく、「愛」によって変えるのです。しかし、それは絶対正義、すなわち自分を変える必要を感じることのない立場から相手を変えようとするのではなく、相手に対する自分のあり方を変えることによって、相手に「回心」を呼び起こすのです。その時、変わるよう挑戦を受けているのは相手ではなく、私たちの自己中心性です。

クリスマスのイエス様の姿。全く無力な幼子の姿をもって差し出された愛の招きに、私たちはどう応えるのか問われています。

娘からの贈り物

広島天使幼稚園 保護者 山道 美和

つい先日のでした。私の誕生日を数日後に控え、娘が園から「帰宅する度」誕生日待ってね！」「ヒミツだよ」「お花作ってるの！」と少しずつプレゼントをほめかす発言をしてくれました。秘密と言いつつも、こらえきれない思いを口にする娘が、おかしき微笑ましく、私も淡い期待を持っていました。

誕生日当日、手渡してもらったプレゼントは、折り紙で作ったバラの花束と切り紙の作品を一枚一枚画用紙に貼り、更にぬいとりで冊子にしたものでした。その作品の重みといったら。娘が毎日、一生懸命に取り組んだ様子が見て取れ、胸が熱くなりました。厚い冊子をぬいとりする事は容易ではなかったようで「手が痛かったんだけどね、頑張ったよ！」と言うその顔は、照れくささの中にどこか誇らしくも見えました。もちろん全てが娘の手によってではなく、「ここはね、先生が手伝ってくれたよ。」と教えてくれました。娘の気持ちを汲み、手を貸してくださった先生方にも感謝の思いがこみ上げました。私は娘を膝に乗せ、心からの「ありがとう」を伝えました。

母という存在に限らず、「誰かの為に頑張りたい」「やってみたい」という気持ちを先生方のお友達の存在が叶えさせてくれる。そういった環境のありがたさをしみじみと感じました。

園生活で培われる感情は本当に尊いものです。こうしたさやかな経験がまた一つ、娘の生きる力となってくれる事を願いながら、手にしたプレゼントを胸に思い馳せました。



カトリック聖園てんしのおうち

～笑顔溢れるなつまつり～

保育士 太田 由惟

小規模保育園の自園は、特性を生かした「より家庭的な保育」を行っています。保育室は比較的広いですが、ホールや園庭といった保育施設を持っていません。開園から2回目の夏を迎え、職員は日々の保育に追われながらも、手探りで進んでいた去年に比べ少しずつ先の見通しが持てるようになってきました。そんな中「楽しい思い出を作りたい!」と夏祭りの企画が上がりました。3種類の出店と写真撮影コーナーを作り、更に栄養士に相談をして初めての行事食の提供を決定しました。当日の子ども達は甚平やヘアゴムでおしゃれをして、笑顔に溢れていました。「楽しかったね!」「またやりたいね!」とあちこちから会話が聞こえてきました。

後日談として保護者の方から「持ち帰ったもので家でも遊んでいます。」「写真かわいかったです。」と沢山の声を頂くことが出来ました。子どもの笑顔は保護者の笑顔に繋がっているのだと実感しました。

初めての行事だったので反省点は沢山ありましたが、それらを踏まえて10月31日はハロウィンパーティーを開催しました。今後の行事でも「子どもたちの笑顔」の奥にある「保護者の笑顔」も見られると思うと今から楽しみでなりません。



三笠藤幼稚園

～毎日が成長～

教諭 斉藤 結香

新年度がスタートし、運動会にお泊り会、あつという間に時は過ぎ、もうすぐクリスマスお遊戯会を迎えようとしています。子どもたち一人一人が協力し、一生懸命に行事を乗り越えていくたびに、子どもたちの可能性は無限大であると感じています。

子ども達は毎朝、玄関にいるマリア様に向かってお祈りをしてから支度をします。年少さんは初めの頃、制服のボタンが自分で出来ない子や、一人で手洗いうがいに行けない子等がいましたが、今ではほとんどの子どもが自分の事は自分で出来るようになりました。また年中・年長さんは自分の事だけでなく、うがいに行けない年少さんを一緒に連れて行ってくれたり、自分から先生の手伝いをしてくれることが多くなり、とても頼もしくなりました。他にも沢山ありますが、子ども達を見ていると、毎日が成長なんだと感じさせられます。

そんな元気いっぱい心優しい藤幼稚園の子ども達と過ごせる毎日に感謝をし、子どもに負けないよう私自身も子どもと一緒に成長していきたいです。



虹の森カトリック幼稚園

～小さな子ども達から教えてもらうこと～

教諭 江口 陽子

私は満3歳と未就園児クラスを担当しています。子ども達と日々過ごしている中で、その素直な反応、吸収力に驚かされることがあります。

子ども達に「かみさまからのおくりもの」の絵本を読んだとき、みんな瞳を輝かせはどの贈り物を持っているかな?と問いかけるとみんな瞳を輝かせて私は〇〇!と答えてくれました。教会を訪問した時には、聖堂の雰囲気を感じ取る様子がありました。ふとした時に「先生!あそこにも神さまがいるよ!」と遊戯室の十字架を指差す子や、階段の踊り場にいるヨセフ様と赤ちゃんを見て「イエス様だね!」という子もいました。そんな時、子ども達の中にちゃんと神さまがいてくれることを感じます。イエス様は子ども達のことを大切にされていました。そして天の国はこのような者たちのものであると言われました。全身全霊で神さまを感じ、近づくことができるからだと私は思うのです。その子ども達と過ごさせて下さることに感謝しながら、私も子ども達のように神さまに少しでも近づけるよう日々素直な心で、神さまの愛を感じ過ごしていきたいと思っています。



登別カトリック聖心幼稚園

～思いをひとつに～

教諭 門脇 麻矢

私は、年中30人のキラキラ輝く天使たちと共に生活をしています。この子たちをカッコいい年長さんに進級させたい!の一心からスタートしました。新入園児さんにとっては、初めての経験ばかりです。絵具やハサミ、のりの活動などもそうです。

「今日帰ってからの〇〇君のご様子はいかがですか?幼稚園でハサミの活動をしたのですが、お家でもハサミを使うことはありますか?持ち方や連続切りの指導をしているので、お家でもハサミを使う機会を作って頂きたいのですが...」と1学期の中頃をお願いしました。1学期の終わりには、めきめきと上手になり、その後、お母さんに連続切りが出来るようになったことを電話で報告したところ、「家でもチラシや新聞紙をハサミで切る練習をしていました。」と聞くことができました。幼稚園と保護者の思いが1つになると、子どもも成長することを実感し、喜びを味わうことが出来ました。これからも、保護者との思いがひとつになるよう努め、子どもたちの成長を見守ってきたいと思います。





クリスマスとサンタさん

苫小牧聖母幼稚園 園長 ライヤ フランシス



数十年前に宣教師になるために大
学、また大学院の勉強中、繰り返し繰り
返し次のように注意されました。「みな
さんはこれから外国で働く希望を持っ
ています。今までアメリカ人として育て
られて、考え方、毎日の生き方、色々な
ところでアメリカの文化の中で育てられ
ました。しかし、他の国へ行くと場合に
よってはその国の文化はアメリカと全然
違いますよ。もしかしたらその国の言葉
よりその文化を受け入れ難いかもしれ
ません。」とのアドバイスを5、6年の間
何回も教えられました。

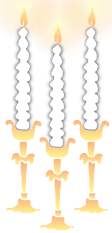
日本にきた時のことです。教えられた
通り、育てられた文化と違う色々な文化
とぶつかりました。わたしの最初の日本
のクリスマスを思い出します。そのクリ
スマスにはすごく驚きました。「それほど
違いましたか、神父さん？」と聞かれる
と、わたしの答えは、「いいえ、そうではな
かった。逆に、こんなに同じ祝い方をする
のはびっくりしました。」です。

話によるとアメリカの兵隊が第二次
大戦後日本に入って、様々なアメリカの
文化を紹介しました。その中でクリスマ
スのお祝いは一番強い影響が残っている
と思います。

もちろん印象深いキャラクターはそ

の長い白いひげと真っ赤な服を着てい
るサンタさんです。実はそのサンタさ
んは1600年ぐらい前にトルコとい
う国に住んでいたキリスト教の司教
様(聖ニコラウス)でした。司教様の知
り合いの方の娘さんは結婚しなかった
けれど必要なお金がありませんでし
た。ある夜聖ニコラウスが誰にも知ら
れずにその家の窓から必要なお金を
投げ入れました。その司教様の評判は
徐々にヨーロッパの北国(オランダ)ま
で広まり、その国の言い方では聖ニコ
ラウスではなくてサンタニコラウス↓
サンタクロースに、そしてサンタクロース
になったのです。

2000年ぐらい前に、神様はわ
たしたちにこれ以上の素晴らしいプ
レゼントを与えてくださいました。そ
れは神様がわたしたちを愛するしる
し、自分のひとり子イエス・キリスト
です。子ども達がイエス様の誕生日と
いうクリスマスを祝うために、待降節
期間中、心の準備、聖劇とお祝いの会
の難しい練習をイエス様に捧げます。世
界中の食べ物のない子ども達のために
大きな力と
なりますよ
うに。



第16回 幼児教育研究大会を終えて

長沼カトリック聖心幼稚園 教頭 小泉 めぐみ

9月29日(土) 前夜の大雨もすつ
かりあがり、穏やかな晴れの日
に、第16回北海道カトリック
学園幼児教育研究会が開催
されました。当日は学園の
教職員104名が来園し、
「自分の考えを伝え合う子
どもの育ち」をテーマに、各
クラスの公開保育を見て頂き
ました。



午後、園長・事務・年
少・年中・年長と5
グループに分かれ
て「分かち合い」
を行ないまし
た。「分かち合
い」では、会場の
狭さから多くの
参加者の皆様に、
ご不便をおかけし
ました事をこの場を
お借りしてお詫び申し
上げます。

当日、普段の園の雰囲気と違
う事に戸惑う園児は少なく、子ども
から参加者の先生達に挨拶をした
り、話しかけたりと二人ひとりの子
どもの姿がありました。
午前は、各クラスでの自由遊びの
様子や縦割り保育活動を設定しま
した。クラスでは、これまで継続して



きた活動を中心
に行い、子どもた
ちが言葉で伝え
合い、耳を傾ける
姿を見て頂きま
した。子ども達の
降園後は、当園
職員と参加者に
よる研究討議。
そのような中でも、「日頃の悩み
や疑問等、各園の先生達と情報交換
を行い、実りのある分かち合いにな
りました。」と温かな感想を頂戴し
感謝の気持ちでいっぱいです。
公開保育を行なうにあたり、年度
当初から職員で話し合い、園内研修
を重ねてきました。今回の研究会の
準備から当日を終えるまでの間で
の、気付き・学び・課題を再度職員で
確認し合い、子どもたちにとって良
い保育を展開できる様努めていき
たいと考えています。たくさんの方の
お恵みに、感謝致します。